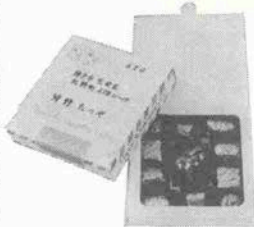


神戸百店会 だより



★あなたの代わりに

チョコレートを送ります
もちろんバレンタインの
チョコレートはあなたが手
渡すのが一番、だけど恥ず
かしいなという方には郵送



ラブレターチョコレート

という方法をお勧め。モロ
ゾフのラブレターチョコレ
ート(600円)は、郵送で
きるバレンタインチョコで
す。遠方の方にも送れて便
利。告白なんて大げさに
考えないで、田舎のおじ
いちゃんや引越してい
った幼な馴染みに送ってあ
げたらいか？

本誌愛読者の皆さんの中
から抽選で10名の方に、モ
ロゾフから代わりにチョコ
レートをお送りします。2

月9日までに葉書で神戸っ

子宛お申し込み下さい。(男
の子から女の子へというのも歓迎
あなたの住所・名前と送り先の住所
・名前を明記の上、神戸市生田区東
町113-11大神ビル「神戸っ子」
バレンタインチョコレートを係まで。

★天然飲料ウーロン茶&ジ
ヤスミン茶UCCより発売

芳しい香りと軽くて清涼
感のある口あたりを持った
アツサリとした味のウーロ
ン茶。ジャスミンの花フク
郁たる香りがゴージャスや
ジャスミン茶。どちらも中
国福建省に産する良質の茶
葉を70%まで半発酵させて
いるので独特の脂肪成分分
解作用を促進させる効用



健康にウーロン茶を

があり、特に油料理、肉料
理等に合わせて飲むと体内
の油成分の消化を助け、脂
肪の摂り過ぎを防ぎます。

また、宿酔いにもきくとか。

ぜひお飲みください。

UCCウーロン茶、UCCジャ
スミン茶ともに400円(250g)

★志奈乃が改装、

お座敷もできました

そば処の志奈乃の2階が改
装されて、小宴会などに利
用できるお座敷になりました。
天麩羅のお小川の経営
なので、天麩羅そばのおい
しさは以前から評判でした
が、改装されてからの志奈
乃のお献立はお弁当、京料



2階はお座敷です

理も追加。本格的なお料理
も楽しめます。

そば処志奈乃／三宮神社前 電話33
18775月曜定休 午前11時～
午後8時

★ゴンチャロフの新製品は 大人の味です

マロンをバターケーキで
くるんだファンローゼ(5
個人500円から)はしつ
とりしたバターケーキと極
上のマロンの調和。1粒ず
つ包んであるのでパターの
風味が失なわれないお菓子
です。

●ショップトビックス

★ニューポートホテルでは、お徳
なパック・パーティーを承ってい
ます。1月16日から2月11日まで
中国料理とビール飲み放題でお1
人様4800円(税・サ込み)
また、15階の回転レストランでの
洋食フルコースで9900円(税
・サ込み)。クラブ、ゼミの追い
出しコンパなどにご利用下さい。

電話23114171

★バンのカスカードから新製品。
グリーンブレッド(ホウレン草入
り)とトマトブレッド(トマト入
り)の2種類。合成着色料などい
っさい使用していないので健康には
もちろん美容にとってもいいんで
すよ。1200円。低カロリーでビ
タミン豊富。イタリア風です。

★呉服のみよしやの春物新作展
示会が2月15・16日と甲陽園のはり
半で開かれます。ご結婚のお仕度
の参考に。案内状をお送りします
大丸前みよしや 電話3311338
8までご連絡下さい。

★オリエンタルホテル地下一階の
グリルでは、2月12日と25日まで
ローストビーフまつりを開催。ロ
ーストビーフに、スープ、サラダ
デザート、コヒー、パンがつい
て一五〇〇円。11時～8時半。

★マイ・フアン・パレンティン
★モロゾフのブルドック250円
★ワグマール350円は、陶器
入りのハートチョコレート。チ
ョコを食べちゃっても大切にしてい
なというカードを添えて。

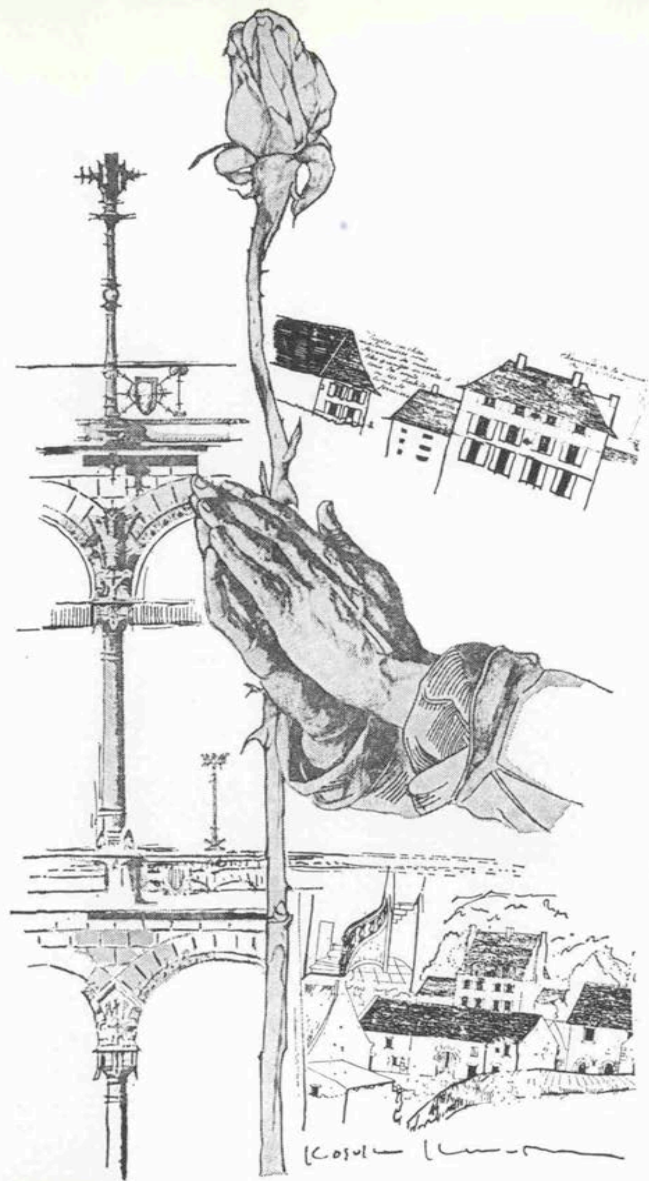
★ゴンチャロフのボンボン(30
個入り1500円)は男性ファン
が多いってご存知？ハートの小箱
もあります。ボンボンのお酒で、
彼のハートに火をつけちゃおう。
♥愛にリボンをかけて、というの
がユーハイムからのメッセージ。
健型のチョコレートシュルツェル
(愛の鍵300円)は今年新発売
この鍵で愛のリボンをはどいて！

■第4回神戸文学賞受賞作品■

溶ける闇

高木敏克

絵／木村光佑



ぼくは自分の世界が少しずつ崩壊してゆくのを知っている。まず最初にこの都会の名前は、次にはその様々なイメージが、きわめて具体的な現象により破壊されてゆくの身をまかせている。たとえば、スペイン・バルセロナ・ランブラスという言葉をも舌の奥で発音してみると、色々な像が浮かんでくる。それは眼球の裏に映像となつて立ち現われるのだが、ぼくの一步一步はその美しい映像を踏み破ることしかない。あつ、しまった。今、何かを踏んでしまった。バナナの皮ならいいのだが、振り向くと犬の糞だ。そのヌルリとした靴底の感覚が右足を追いかけてもう二十メートルもついてきている。それはいやに黄色く見えたが、ぼくの善意な認識がそこにバナナを想像したためだ。それは欺瞞だ。おそらく、ぼくのバルセロナに対するイメージも、そのような自己欺瞞的な想像力に培われたものだ。ここでは街の名が、イメージが、ぼくからどんどん剥げ落ちてゆき、ぼくは少しずつ想像力を喪失して、単なる一個の肉体になってゆくのだ。それはカタルシスのように、ぼくにある種の快感を与える。その快感のためには、幻想は大きければ大きい程よい。それは幻想の悲劇であり、物質の、あるいは見知らぬ事物の圧倒的な勝利だ。だが、いまだに悲傷な幻想の虜であるこのぼくは、空腹に対してもあるイメージを与えようとしている。そんなもので腹がふくれるはずはないのだが、ぼくが求めているのは、どこかのグラビア雑誌で見たスペイン料理の写真でしかないのだ。

いくつかのRESTAURANTの前を通り過ぎたのち、リュックサックを背負ったままでも入れる大きな入口のある目的地に着いた。ドアの覗き窓から見える内部の様子は、まるで溶鉱炉の中の炎さながら、赤々と浮かび上がっている。赤ら顔で語り合う男女の視線がギリギリと相手の眼球に突き刺さり、その視線を切つて給仕の手が伸びる。その横の席では、全身の毛穴を開いてアル

コールを発散しながら討論する男が額の汗をハンカチーフで拭い終ると、その大きな手がテーブルをたたく。それらの間をカストロ髭の男が、背中の線、脚の線にびったり張り付く黒いスーツで、つっぱって歩いている。彼はテーブルの上に目を配り、時々するりと振り返ると、客たちの話し声に耳の穴を向け、彼らの満足に安心すると顔をそらし、あらぬ方向に視線を遊ばせるのだが、正面から視ると静かな顔だ。その顔がしだいに大きくなり、ドアの覗き窓と同じ位になると、ぼくは男の真青な瞳の色を見た。ドアが開くと、サングラスを払い落とされたのかと思うほどの照明に襲われて、ぼくは人声と体臭とアルコールの保温箱の中に、揺れながら、床の異和感を踏みしめて入ってゆく。パイプの煙が赤茶けた古木に吸いついてゆく。肉料理の湯気は、柱、梁に張り付いて、艶やかな照りを与えているが、それら見知らぬ物とぼくとの距離を埋めているのは、アルコール臭い人々の会話である。人声は誰によって発せられるのでもなく、部屋全体から沸き上がり、適度の煙と湿度に味付けされて、燻製のようにしわがれている。垂れ下がるソーセージ、ニンニクの束、それら壁の上のひからびた静物の前を、そそくさと給仕たちが駆け抜ける。その奥では、湯気がもうもうと立ち上り、コックたちの赤ら顔を蒸し上げる。調理場は光の中にゆらめいて、銀の皿、流れる水、刃物たちから反射する逆光が、コックの顔を切りきざむ。それがこの店の中心で、そこから赤い血の料理が、頸動脈をふくらませた給仕たちによって運ばれる。それを見て、ぼくの心臓がどきどきするのはきつとレタラチュールという酒のせいだ。悪いのは心臓ではなく、酒だ。レタラチュールのために異和感はだんだん激しいものになる。そう納得するためにもう一杯飲みほすと、この異物に満ちたレストランの中でも少しは安心することができる。だが異和感は解消した訳ではなく、なお一層激しいものになってくるようだ。そのいたたまれなさをなだめるために、ぼくはさらに飲む。毒をもって毒を制することく、

何杯も飲む。激しい異和感を生む美酒は、それを飲まなければ苦しむこともないのだが、飲みはじめはやいなや、次々に飲み重ねなければ安心できず。安心したとて、元にもどる訳ではなく、つかのまの安心がさらに強烈な異和感を育て上げてゆくのだ。おそらく、この苦酒のために世界が異物と化するのではなく、この酒はぼく自身を異物へと、異物のはての怪物へと変身させつつあるのだ。ぼくの心臓の鼓動はしだいに大きくなってきて、やがて、自分の肉体だとは納得しかねる程の激しさで頸動脈を打ち鳴らし、ついには鼓膜を打ち破らんばかりの大音響になつてきた。もはや世界全体が胎児をゆする母体となり、激しい鼓動で真赤な溶鉄の血液を送り込んでくる。ぼくを自意識の中に閉じ込める異和感は燃え上がり、世界全体が爆発寸前の状態にのぼりつめ、ぼくは生まれつつ殺される胎児のように堕ちながら叫びを上げる。その剃刀状の叫びは、世界を水平線まで引き裂くことができる程だ。やがて幕はあくだろう。

どれ程飲んだであろうか。ぼくがこのレストランに入つた時にはすでにランチタイムが終りかけていて、ぼくはディナータイムのはじまるまでの数時間を飲み続けたことになる。レストランはナイトショーの舞台をしつらえ、やがて幕はあく。客たちの激しい歓声に暗幕は引き裂かれ、暗幕の中から生まれたばかりの司会者が、スポットライトに照らされる。

△メダム・メツシユ・セニョーラ・セニョール、ここにお集まりの各国の皆様方、今宵はわれわれのすばらしいディナーショーをお引き立ていただきましてありがとうございます。お目の高い皆様方のお耳にも達するこれらのショーは、前評判にもまして華やかに美しく、皆様方のお目を満足させるはず。なぜなら、これらよりすぐりのショーは、よりすぐりの皆様方のためにこそ創られているからです。▽と数か国語で次々に繰り返す。

△お待たせいたしました。レディザンジェントルマンまず最初の登場は、カラコル姉妹の影絵ショー。▽

二枚目の暗幕がさつと開くと、真白なスクリーンが現われる。純白の画面の端から、くねくねと空をまざる二本の触角が現われ、それに続いて、なまめかしのたうつ蝸牛の胴体が、ゆっくりとじらすように這って出る。やがて、背中の巨大な巻貝が、揺れながら、スクリーンの中央に移動する。照明が強められ、影が少しずつ白み始めると、豊満な女体が横たわっているのが見えてくる。その尻の上には、もう一人の女が体を丸めてうずくまっているが、遠望するとそれは完璧な巻貝に見える。その下で二本の腕を触角のように操る女体は、生まれながらの軟体動物の仕草で、巨大な尻をうねらせている。

白い画面は、実は何枚も重ねられたシルクスクリーンのようであり、次々に剝げ落ちて、しだいにはつきりと二つの女体を浮かび上がらせる。観客は唾を飲み声も出ず、やがて立ち現われる鮮明な生身の肉体を期待する。

二人の女性像はしだいに独立した舞踏を演じながら、別々の個性的な容姿を際立たせてくる。均整のとれた姿態、きわめてスベイン的に整った容貌が見えてくると、どうだろう、二人の顔が急に大きくなり、スクリーンいっぱいに拡がって、にっこり笑う。観客は映写機に騙されていたのであり、虚像を見詰めていたのである。だが、裏切られた訳ではない。スクリーンが床まで真直ぐに切り裂かれ、それを破りながら映画の二人の出演者が飛び出してくる。とすると、先程の映像はどこまでが影絵であり、どこからが透視された実像であり、どれが虚像なのか解らなくなる。観客はあつけにとられ、その前では全裸の女体が、カクテル光線に舞い狂う。

ぼくがその女性の細部に目をとられ、激しい音楽に氣をとられていると、舞踏はその音階をのぼりつめ、女は飛び発つ火喰い鳥の表情のまま突然消えた。光の消えた舞台の闇にはその残像が生きている。それは、きわめて重層的に繰り返される旋律が、その技巧的な展開にしたいに行き詰まり、もはや延命しようのない形式と化し、せつば詰まった胸苦しさを突然引き裂きながら立ち現わ

れるスペイン人の顔である。

次々にショーは紹介される。紹介されては怪しげな光を放ち、光学的な虚像のように闇に消えてゆく。眩惑的な舞台を掻きまわして音楽が流れ、揺れながら、ぼくは次々に差し出される料理をたிரらげてゆく。レモンと卵のギリシャ風スープを皮切りに、パブリカの利いたシシカバブー、トマトに詰められた挽き肉料理、様々な魚のフライ、ビフテキの後では山のように盛られたサラダ。だが飢餓感はあることがない。ぼくの消化器管においては、食べる速度に消化する速度が追いついていて、食物は口に入るや飲み込まれ、胃袋に達するやいなや激しく消化しつくされて、たちまち栄養となり、そのエネルギー

ギーがすぐさま消化器管を活動せしめるのである。そのように、ぼくは長い時間をかけて大量の食事をする。長い食事はぼくだけではない。ここでは誰もがゲップとアクビを交互に繰り返しながら、ブツブツと語り続け、たまに黙りこくと激しい咀嚼音を響かせてくる。ぼくの席から見渡すと、何重にも重なって見えるテーブルの上にはローソクが一つずつ置かれ、それに照らしだされる人々の顔は生首のように闇に浮かび、激しく顎を動かして、コクリ、コクリと頷きあい、油ぎった料理に負けない程に顔を光らせる。それら基本的な人間の動作というものは、静かに観察すればするほど不気味で単調なものだから、ぼくは大きな口を開いてパンにかぶりついた



少女の体のなかで、一片のパンが、いかにその形状を変化させ、肉体と関係し、排泄されるのかを想像してみたりする。テーブル越しに見える舞台の上では、数人の楽団が立ち並び、体を左右にゆすりながら、ローソクの花へ向けて、軽やかなメロディーを流し続ける。しかし、よく見ると、彼らも時々楽器を口から離してアクビする。

あやうく眠り込みそうになったばかりに必要なのは一つのベッドだ。ぼくは必死で外に出て、ホテルを捜さねばならない。それだけの決意を実行するにも随分と骨が折れた。なによりも嫌なことは、あの巨大なリュックサックを再び背負わなければならないことだった。

ランプラス通りへ出ると、街灯は並木に挟まれて、緑色の光を放ち、光の届かない小枝の葉の上ではインジゴ色の星空が冷たそうだ。星空を追い掛けて路地に入ると、屋根の連なりが、鰐の歯の形で、くっきり黒く、星空を囁んでいる。囁み砕かれた空の破片が零れ落ちて無数の窓ガラスに嵌まっている。その下では薄汚れた壁々が、薄闇を吸い込もうとしている。薄闇は壁の間に忍び込み、影という影を終て抱き起こし、透明な空気の中に連れ出そうとしている。闇の中では石までが、透明で流れやすい冷気に支配され、輪郭を風に溶かし、その重量を、暗い地底に音もなく落下させている。かすかに、その上を男の影が横切つてゆく。やがて、男は分厚いゴチツクの壁の中を通り抜けて消えてしまう。ぼくは目をこする。男たちを呑み込んだ建物は、その外壁を闇に明け渡したまま、その内壁を家庭の形に輝かせ、闇の中に、いくつもの光の部屋を浮かび上がらせる。路地の奥では、壁の上にガス灯が並び、総てのガス灯の下では背の高い娼婦が長い煙草に火をつける。壁灯の光では充分に証明したい彼女らの美貌を、ガスライターが下からも照らす。だが、本当に美しい娼婦はガスライターを持ってない。黙って煙草をくわえて待っている。遠くから光が近づき、男と女の顔が闇に浮かび、接近するとすぐ見えなくなる。煙草の火が二つ闇に泳ぎ、ぼつんと落ちて火の粉が散る。

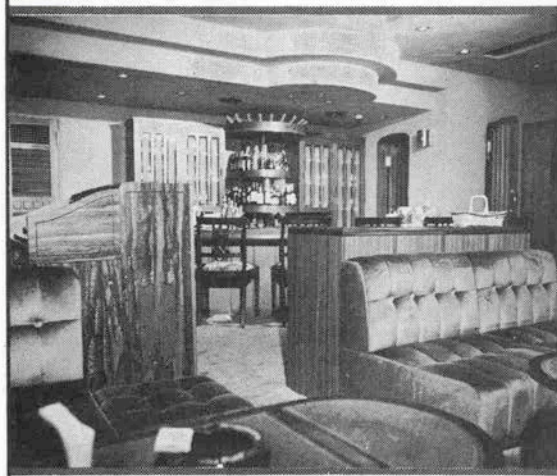
ぼくは落ちた煙草を踏みつけて、さらに路地の奥に入り、HOTELを捜す。今まで気付かなかったのだが、路地はわずかに曲がってゆき、しかも少しずつ下り坂になっている。しまった、と思う時にはもう遅すぎる。一度失われた方向感覚というのは永遠に取り戻すことができない。もうこれ以上迷わないためには、何でもいから、ホテルを一軒探し出すことだ。だがどうだろう。ホテルが一軒だけ現われたなら、すぐさまそこに入るのに、四つ角を曲がると、何件ものHOTELが輝いている。この事態は選ぶという厄介をぼくに押し付ける。ぼくはさらに迷い続けなければならない。

まず最初のHOTELの下には、一人の男が立っていて、右手をさしあげてネオンを指差している。だが近くと、それは人形で、いつまでも髭の下で笑いながら、闇を見詰めている。

二番目のHOTELの下には、酔っぱらいが倒れていて、口から食べたばかりの食物を出しているところだ。それを二匹の犬が奪いあい、大きな犬が全部たいらげたが、路上の雑炊には多量のアルコールが含まれているらしく、腰をふらつかせながら十メートル程歩いたが、すぐにぶっ倒れて、再び路上に食物を戻す。さらにその奥の方では娼婦たちが夜光性化粧品を塗りたくり、熱帯魚のように泳ぎながらホテルの入口を出たり入ったりする。

それら様々な現象により、ホテルは成立している。それらの現象のないところでは、またホテルもないのだ。はつきりしていることは、ぼく自身もそれらの現象に含まれつつある一つの現象にすぎないということだ。ぼくには、一つのホテルを採用する理由もなければ、それを拒絶する理由もない。ぼくがあるホテルの入口に入るということは、それら様々な現象の中に自分を含みこまれてゆくということ以上の何の意味もない。ぼくはホテルに入る前にホテルを選ぶのではなく、ホテルに入ってしまったから、ホテルを選んだと思ひこむのだ。(つづく)

今宵もまた
明るくモダンな CHISATO で



STAND
CHISATO
千里

阪本 千里

神戸市生田区下山手通2丁目7-1 KSMビル1F

TEL (078) 331-4730

5:00PM~0:00AM 日曜・祭日休

潜り戸を通して
“花,,のおふくろさんの味を



●こん立て●
とろろ飯定食
お好み定食
天プラ定食
おつくり定食
たかのり弁当
花そうめん
寄せ鍋
茶碗蒸し
湯豆腐

和風季節料理



11:30A.M~8:00P.M 月曜日定休
さんプラザ地階 ☎331-0087

●第4回神戸女流文学賞受賞作品

影と棲む²



田口佳子

絵/田中徳喜

バスを降りて歩きはじめてから、サングラスをかけた。眩しく白い陽を反していた初夏の町並みが鮎色に沈んだ。色彩とは思えないものだ。

陽の下で、家も木も石も電柱も、サングラスのレンズを通すとびたつ呼吸を停止したようになって何やら秘密めいた色を帯びてくる。見慣れ住み慣れた町が、不自然な色の底で全然違った場所のように見えると、そこを歩く自分は直射日光の下では変化はないのに、別個の自分が歩くような気がした。

近ずいて来た初老の主婦が、母の知り合いの人物だとわかって、会釈しようとするより早く、その人はついと通り過ぎてしまった。

気がつかなかったらしいとわかると、苑子は安堵と滑稽さを感じた。人間の視覚なんていい加減なものだと思っ

た。熱気さえも封じられたような、鮎色の中で家が近くなってきた。

古いブロックの塀に、大きな柿の木の枝がしなだれかかるようにしている。

若葉の色も、更に近寄って見る門柱の表札の父の名も、

淡い褐色で古いネガを見るようだった。手を差しこんで門を外し、門を開いて中に入る。靴を脱いでいると、庭に通じる木戸が鳴って父が顔を覗かせた。

「よう、お前か、よく来たな」

父のくだけた表情につづいて、奥の座敷から出て来た母は翳ったままの色で、まあと小さくいつて突っ立っている。

三人は三様の、あるとまどいを見せてあわただしい感情のページをめくるように、すばやく視線を渡し合った。短い沈黙の中で、苑子は強い匂いを嗅いだ。幼い頃から彼女の体に泌みついた独特の香だった。信心深い母が、年中祭壇に焚く線香の匂いは家全体に泌みついていて、いつか、家そのものが匂いを放つ感すらあった。

湿っぽく執拗にまつわりつくのを、ふりきるようにして苑子は茶の間に通った。

道を歩いている時、吹いてくる風にあんなに匂ったいともより濃いいにつけた香水も影うすいほど、茶の間も抹香臭い。

理性も情感も絡めとるように、唯、香が重く湿って漂う。

南に面しての庭は木が多く、夏はいろいろな虫がよく部屋にとびこんで来た。

背後が山になっているせいか、年中、青っぽく暗い家である。

「苑子、それ…。外しなさい、家の中よ」

母が非難がましくいった。テーブルの前に坐った苑子はゆっくりとサングラスを外す。

植木の手入れでもしていたのか、泥のついた軍手を丸めもった父が、湯殿へ行って水の音をさせるのが聞こえる。

気だった。前のままだ、と苑子は思う。何かを抑えつけて二人は、目を逸らし合いながら見えぬ糸の両端を握っていた。

「少し持って行きたいものがあって取りに来たのよ」

苑子は目を逸らしたままでいった。

「そのうちに帰ってくるだろうとわかっていましたよ、あなたのものは全部そのままにしてあるから…」

母は膝に置いた手をみつめていう。

父が湯殿から出て来た。うれしそうな顔をしている。



る以外は森閑としている。お互いの呼吸の音が聞こえる程だった。

「お父さんが弱っているといってたけど、案外、元氣そうじゃないの」

「もう年ですからね、年中どちらも体のあちこちがどうのこうのといっているけど、まあ別にどうってこともないわ。苑子も元氣そうね」

それだけ交して、母と娘は特別なつかしそうでもなく、他人行儀というのでもなく向き合っていた。一年ぶりで、しかも、苑子の離婚という問題を挟んで会ったにしては、生の感情がどこから洩れてしまったような乾いた雰囲

苑子が持参した菓子箱が開かれ、お茶が淹れられた。彼女は、自分の前に置かれた湯呑みが茶托つきの来客用のものだ気がついた。

母は父と自分用に、出石焼の揃いの品を使った。白地に秋草を刻みこんだその夫婦湯呑みは、苑子にも見覚えがあった。母が友人たちと山陰へ旅行をした時に買って来たものだった。苑子用のが別の一つあった筈だが、割れてしまったのだろうか。

母には昔から多分に見栄っぱりなところがあって、夫婦や親子といった肉親の絆をことさら円満に堅固なもののように折にふれ他人に誇示したところがあった。

それは裏を返せば、継母に育てられて温かな情愛を知らぬまま大きくなると、追いやるように女中奉公に出された充たされぬ自分の心への穴埋めであり、現実への演出に過ぎなかった。

苑子は父が、自分の家の使用人である女を、その美貌に惹かれて周囲の反対を押しきって妻にしたという話を親戚の者から聞かされて知っている。不幸な生い立ちを、どう同情的にさし引きしても、彼女は母の自己中心的な人間性を好きになれなかった。結局、母は夫を真実愛してもいないし、その間に生まれた父親にべつたりの苑子をも愛していなかった。常に愛するのは自分だけに思えた。

旅先の土産物店で、解放感に唆かされた母が、多分、既に寡婦になった人も混るであろう友人たちに冷やかされながら、さも幸せそうに選んだに違いない湯呑みが、まだ割れもせずに湯気を立てているのを苑子はほろ苦い微笑でみつめていた。

濃い煎茶が好きなのは、飲み口に当たる秋草模様の所が、渋い褐色になっており、母のはうっすらとモスグリーンに色づいていた。使いこむほどに茶渋が、微妙な色づけをする清楚な白い陶器は、大ぶりと小ぶりに分けられてその色も濃淡に、自然に染め分けられたところが妙に男と女を思わせてなまなましかった。

苑子は、昌男との二年の結婚生活で揃いの食器など使ったことがない。使えなかったのである。昌男は母親と夫婦茶碗を使っていた。「色柄の好みがびつたり合いますのよ。だから、ついこんな風になってしましますの」

初めてそれを見て、何となくぎょっとした苑子に、年令より若く見える姑はなまめかしい笑い方をした。気がつくのと、揃いの品物は、茶碗だけではなかった。浴衣も、浴用タオルも暮らしの中で、母と息子は好みを共有し合っている、一体感を楽しんでいるように見えた。

「みっともないわ、趣味がわるいわ。私と結婚した以上、もうやめて貰いたいの」

苑子がいうと、そんなことまで嫉くのかと、昌男は呆れた風に顔を見るばかりだった。

母のように、とくに心の離れた者同士が、その場の気分のままに求めた品を、何の意味づけもなく無造作に使うのはまだしも愛嬌があった。多分、その時の彼女は、使う品が揃いのものであることすら忘れていた筈だった。

「その後、何も連絡はないの？」
湯呑みを口に運びかけた母が、湯気の中から目を向けた。

昌男との生活の一端を、茶碗を見て思い出していた苑子はびくりとする。

彼女は母の眼が嫌いだった。

若い日の美しさを立証する部分は、まだ豊かな髪の毛の生え際のよさや、しみ一つない皺の少ない肌にもうかがえるが、切れの大きな張りのあるよく光る瞳に集約されていた。

その眼は、彼女の性格的なものを一番よく現わしていた。知的な聰明さとは違った、動物的な感覚の鋭さがあり、それが彼女のもつ予言好きで巫女的な雰囲気を一層強めていた。母は昔から勘の鋭さを誇っていた。

理論や判断、思考力の積み重ねになる結果よりも、自分の予知能力、直感の方が正しいと固く信じこんでいた。苑子の記憶にある若い日の両親の姿は、父の知性と母の直感とのずれからくる争いが多かったようだ。

体の弱かった苑子をめぐって、友人に医師の多い父の考えと、信仰深い母とはお互いのいい分を守って対立した。

自信たっぷりな苑子を引き受けた医師の手から、ひったくるようにしてはかばしくない彼女を取り戻した母が信じる予言者の言葉に従って民間療法で、こじれた肋膜炎を全快させた時のことは苑子自身もよく覚えていた。

生まれ育ち、知識教養の面で、夫やその一族に頭の上からなかった母が、事あるごとに勝星を挙げたのは彼女の直感から成る打つ手の早さに負うところも多かった。

母にみつめられると嘘はつけず、こちらの考えが暗黙のうちに特殊な電波で吸い取られて行くような気がするのだ。

「何もないわ、あの人とはあれつきりよ」

「本当に？ こっそり二人で会ったりしてはいないでしょうね？」

「……」

答えるのもばからしくて、苑子は自分から視線を余裕をもって外した。母は追い打ちをかけてくる。いつもの口調で……。

「焼けぼっくりに火ってこと知っているでしょう？ せいぜい注意することね」

「……」

「どうもあんたを見ると、そういう感じがするものだから」

また始まったと苑子が思うと同時に、思いを同じくしたらしい父の、千切りするような吐息が聞こえた。

そういう感じがするというのは母の口癖だった。冷たい、色のついた風がすつとよぎるように一つの考え、想念みたいなものが頭を突き抜けるのだそうである。

「もういいじゃないか。苑子だって十九や二十才の娘じゃないんだ。それに、ああいう別れだったんだからな、本人がその辺のことは一番こたえてる筈だよ」

「ああいう別れだったからいうんです。苑子、よく気をつけなさいよ、ぶざまなことだけはしないで頂だい」
母は自信ありげに眉を寄せてくり返す。



苑子はまた、ぴくんとする。ああいう別れという意味

が、父と母とで食い違っているような気がしたからだった。父は苑子のいい分を信じて、姑との不仲が最大の原因だったと思っている。優柔不断なひとり息子の昌男の、マザーコンプレックスに業を煮やして別れたのだと信じている。だが、母もそうだとはいきれなかった。

昌男との仲がこじれだしても、苑子は母には相談しなかった。結婚する時も、世間一般の母娘のように、希望やよろこびや、さまざまな臆測や不安感や、感傷で一層強く縋り合わされた絆に甘く息苦しい時を過ごす、といった風なことはなかった。

小さい頃から母の直感力の影響で、その行動すら時には束縛されて育った彼女は、結婚への夢を素直に羽ばたかせることができなかった。母は何か、事あることに物心ついた苑子に対して、あなたは家庭に収まりきらない性分だといいつづけて来た。彼女にいわせると、例によって「そういう感じがするから」なのだろうが、小さな、ちよつとした行儀のわるさや、人との接し方の要領のわるさ、不器用さをさも具体例のように取り上げていわれると、少女の苑子は少なからず傷ついた。

子ども心にも母の美しさは十分認められ、内心誇りとするところでもあった。その美しい母から、新しい衣服を着せられても、何だかがっかりしたような色だけ見せつけられると、ふくらんだ心もしぼんだ。

苑子が昌男との結婚を決心した時も、二年足らずの月日の間の姑との葛藤も、まず告げたのは父が最初だった。離婚に踏み切った時でさえも、母からは常に一步離れていた。だから、今更、とやこういわれることはないのだ。しばらく忘れていた不快さが彼女を襲った。苑子は、照り翳りの激しい、母の鏡みたいな瞳をじっと見据えた。△離婚の原因が昌男さんのお母さんだったというのは嘘でしょう▽

と、その眼はいつていた。逃げるのが口惜しくて、△では何だったというの？▽

苑子が問い返す。

△昌男さんと巧く行かなかったのでしょうか？夫婦としての結びめをきちんと作ることができなかったからでしょう▽

眼はいつづける。

△苑子、あなたは女として落第です。私がずっといつづけて来たように、あなたという娘は家庭に収まりきらぬ人なのです▽

△いいえ、そんなことはないわ、子どもは流れたけれど妊娠した段階では少なくともお母さんより女としてまともだった筈よ。私は昌男を愛してみごもったけれど、結婚して一年も経たぬ間から別れたいと思いつづけたというあなたにとって、私を宿したということはいったい何だったの？ 確かな結びめだったのでしょか？▽

苑子さえないければ、とつくに別れていたとよく母はいった。別れようと決意したとたんにみごもったのだともいった。

苑子にはそれが、女の体のしくみの不合理を嘆くより、卑怯な逃げの口実にしか思えない。母がひそと目を伏せた。現実の声で、ぼつりといった。

「ご縁がなかったんだわねえ。案外巧く行ってくれるかもしれないと思ったのに」嘘ばかり。苑子は表情を崩さずに内心でうつすらと笑う。

△あなたのお得意の直感とやらのリーダーに、赤信号が出ていたのではなかったの？

それをわざと知らん顔して、婚期を逸した私が、だんだん嵩高くて世間体がわるいため、結婚の話聞いてほつとしたふりをしてたんじゃありませんか。それに、何もかも父親一辺倒の私が目ざわりで憎くもあつたしね▽△あんなだって、内々焦ってたんじゃないの？ お父さん子っついていわれて満足した時代が過ぎると女として迷った筈よ▽